The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クローデルにおける<<フォルム>>の概念について
Author(s)	奥田, 純子
Citation	Gallia. 1979, 18, p. 60-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5346
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

クローデルにおける《フォルム[1)]》の概念について

奥　田　純　子

クローデルは一切は運動であるとする。そして，事物の絶えざる生成と消滅を世界の中に認めた。だが彼は，「万物は流転しているから事物についての真の認識は存在しない。」というヘラクレイトス流の生滅流転の考えに陥ることはなかった。確かに，万物は生滅変化し，流れに押し流されては消え去っていくように見える。しかし，すべてがとりとめもなく，ただ流れていくだけではない。この生滅変化する自然的世界の中にも，恒常なもの，恒久性をもったものが確かにあると彼は考えた。ただ彼は，「事物の実体はそのまま，その基である質料にとどまり，ただ，それの受動相にのみ，その生滅転化があらわれる。」とする，すなわち，質料こそが原理であるとして，この質料の循環的存続の前に事物の生滅変化を消去し，そこにこの世界の恒常性を求めるということはしなかった。——

> なるほど，あなたが間違ってあなた自身だと思いこんでいらっしゃるもの，それはいつかは滅びるでしょう。でも，あなたの肉体はバラの中に，あなたの息は風の息吹の中に，あなたの眼は螢の火の中に，永遠に甦り続けることでしょう，等々。それは，こういっているようなものだ。「ここにミロのヴィーナスがある。これをいくつかの舗石の形に切ろう。なるほど，それは彫像としては存在しなくなるであろう。だが，舗石として，ナイフのとぎ粉として，相変わらず存在し続けることであろう。」と。私はこう主張します。そのヴィーナス像は，堆肥となったバラと同様，以後，完全かつ絶対に存在しなくなってしまったのだと[2)]。

では，一体，クローデルは何にこの自然的世界の恒常性を見出したのであろうか。ジャック・リヴィエールに宛てた手紙の中で，彼は次のように書いている。——

> 物質は過ぎ去ります。しかし，フォルムは，自身がその部分的影像である神の如く，永遠に更新されながら，常に同一に保たれます[3)]。

すなわち，フォルムこそが，この世界の恒常性をなしていると，彼はみなしたのである。このフォルムの概念は，彼の思想の中でも非常に重要なものであり，又，物質的無限の否

定，世界の閉鎖，生物進化論への拒絶反応等，重要なクローデル的テーマとも深くかかわりあっている。紙数の関係上，これらのテーマとのかかわりは別の機会に譲るとして，本論では、『詩法』を中心に，このフォルムの概念を明確にするとともに，どうして彼はこの概念に到達しなければならなかったのかを論じてみたい。

さて，フォルムというこの言葉の訳語としては，形，形象，形態，形式，形相等，具体的な次元のものから抽象的次元のものまで様々なものがあり，それぞれニュアンスの相違を持っている。クローデルは，『詩法』において，これら様々な意味を含むものとして，一様にフォルムという語を用いている。ある意味で，フォルムという言葉のもつ多面性を利用して，抽象的であると同時に具体的でもある非常に微妙な概念をうまく表現したといえよう。ところで，このフォルムの概念の出発点が，アリストテレス，及び，トマス・アクィナスの形相概念であったということは確かとみてよかろう。なぜなら，『詩法』の基礎をなすものとして，1895年頃から何年にもわたってなされたトマス・アクィナスの『神学大全』の読書をあげているし[4]，アリストテレスについては，1887年頃『形而上学』を読み強く影響されたとし，又，『神学大全』の読書や『詩法』の創作との関連も認めているからである[5]。ではまず，この両者の形相概念がいかなるものであったかを概観しておくことにしよう。

アリストテレスにおいては，形相はエイドスという言葉で示されている。事物から離れて，独立して存在する超越的普遍的なプラトン的エイドスではなく，事物に内在するものとしてのエイドスという概念を初めて確立したのが，アリストテレスであったというのは周知のとおりである。『形而上学』によれば，このようなエイドス（形相）とは，事物をそのものたらしめている本質であり，質料を規定して，そのような事物を現実存在たらしめているものである。すなわち，質料が形相に限定されてはじめて，個々の事物はそのものとして存在しうる。そして，運動及び生成という観点から眺めるならば，質料が可能態にあるのに対して，形相は現実態であり，従って，形相は運動の限界及び終りである。言いかえれば，形相の実現は，事物の完成，現実化であり，生成の目的，終りでもある。以上が，『形而上学』に展開されているアリストテレスの形相概念の概略である。トマスについては，彼の哲学の重要な支えがアリストテレスにあり，様々な概念を彼から引き継いでいるように，彼の形相（フォルマ）の概念も，大体においてアリストテレスのものと一致する。彼は，形相と質料の他に存在という第三の原理を設定し，それを形相の上に置きはしたが，又，質料をアリストテレスのように近接質料ではなく，主に第一質料としてとらえはしたが，質料に対立する形相（フォルマ）の意味，個々の事物における役割は，アリストテレスのものをほぼそのまま引き継いでいるといえる。ではこのことを念頭に置いた上で，クローデルのフォルムの概念がいかなるものであるかを『詩法』を中心に考察していきたい。

まず第一に，クローデルは，フォルムを運動に対立するものとして設定した。すでに述べたように，クローデルの宇宙観の根底には，「一切は運動である。」とするこの考えがある。なぜなら，神のみが唯一の実在であり，従って，神の外にある一切の事物は真の意味では存在することができない。つまりは，運動においてしか，その実存を見出すことができないからだ。——

> 神は実在のすべてであるがゆえに，何物に対しても，それぞれのやり方で，神から排除されるという条件でしか，ともに存在することを許容しえない。この垂直なる証人である人間は，物質を分析してみた結果，純粋に数学的な事実，つまり運動しか確認できない。 (184頁)
>
> 神の外にある一切のものは逃走あるいは運動の状態にある。 (182頁)

又，彼は，運動の起源は神との接触が物質のうちにひきおこす恐怖，逃走への衝動であるとしている。——「運動の起源は，物質が，自分とは異なるある実在，つまり「精神」と接触した際に起こすふるえ，つまりは神への怖れである。(125頁)」

しかし，クローデルはこの運動を限りのないものとは考えなかった。なぜなら，一切の運動が無際限なものであれば，この世界の中には何一つとして事物は出現し得ないからである。そこで，彼は，運動にはそれを停止させる限界があり，この限界に到達することによって，そこにフォルムが形成されるとした。まさに，これが事物の出現である。——

> すべての運動は，第二に，それを停止させる終点，すなわちフォルムをめざしている。 (182頁)
>
> 運動は，おのれを停止させ限界づける終点から，そのフォルムを受け取る。 (193頁)
>
> すべての運動はある終点によって限界づけられる。これが，存在物の生産であり，出生である…… (185頁)

すなわち，フォルムとは，運動の限界，終点であり，フォルムの実現が運動の目的である。そして，フォルムの完成すなわち事物の出現であるように，フォルムとは，事物の現実存在を可能にするまさにそのものである。——「それら〔フォルム〕は現実には物体であり，すべての事物はフォルムにおいて現実化物体化される。(155頁)」別のところで，クローデルは，事物が出現するに至る経過を次のように極めて具体的に示している。——

> 終点への，フォルムへの衝突が，物質を落下沈澱させる[6]。
>
> 神によって決められた終点への衝突がフォルムを決定する。そして，その衝突が，

ある種の反響を伴って，物質を《落下沈澱》させる。だが，いかなるところにおいても，この物質はフォルムなしには認識し得ない[7)]。

すなわち，運動に限界が与えられて，そこにフォルムが決定される。そして，運動がこの終点にぶつかった衝撃で質料的物質が寄せ集められ，それがフォルムにおいて構成されるというものである。これらの言葉からもわかるように，クローデルは質料的物質を単なる材料的なものにすぎないとし，フォルムこそが事物をそのものたらしめていると考えた。クローデルにおいては，質料とはフォルムなしには現実存在の不可能なもの，感覚することも，認識することもできないものである。このようなものには注意を払う必要すらないと考えているのであろうか，『詩法』の中では，質料への言及は殆んどみられない。

さて，以上みてきたように，フォルムは運動に対立する概念として設定されたわけであるが，クローデルはこの両者の間に極めて特異な関係を設けた。すなわち，運動がその限界に到達し，フォルムを完成させても，完全に停止してしまうのではなく，以後は，フォルムの中に閉じこめられた運動，振動（vibration）という形に変形されて持続するというものである。――「振動とはフォルムの囚われとなった運動である。(155頁)」又，フォルムにしても，一度完成するとそれで終りというのではなく，事物が存在を続ける為には，以後は，このフォルムを維持する活動が必要であり，それが振動なのである。――

フォルムは少しも休息を持たない。それは，おのれに課せられた義務である仕事，すなわち，存在する，自己をつくりだし維持するという仕事を絶えず合計していく。
(155―6頁)

……すべてのフォルムは，ある振動の平衡状態がつくりだすものであり，その証言である。 (163頁)

存在物は絶えず出生しており，おのれに割り当てられたフォルムを絶えず満たしています。それは，円によってあらわすことのできるあるフォルムを持っていて，絶えずこの円形の領域を満たしています。一瞬たりとも止むことのない，中心から周辺に向かう振動によって，それを満たしているのです[8)]。

ここに，一切は運動であり，世界は絶えず出生しているとする宇宙の力動性と，事物の存在を可能にするフォルムの固定性をうまく合致させたクローデルの苦肉の策があり，まさにクローデル的特質といえるものを見出すことができる。

ところで，クローデルは，フォルムと運動の対立をもう一つ示している。すなわち，一切の事物に共通なものが運動であるとするなら，事物の差異をつくりだしているのは，この運動に加えられた限界，終点，つまり，フォルムであるということだ。――

すべての存在物の類似点，運動。　(149頁)

すべての存在物の相違する点，終点。すなわち，他の諸々の存在物がそれらに課する停止。　(149頁)

以上が，運動という対立概念を通してみたクローデルのフォルムの概念である。では以下，このフォルムとは，個々の事物にとって一体何であるとクローデルは考えていたのかを考察してみたい。そのフォルムの定義を，彼自身の表現から拾いだしてみた。——

すべての運動は，その終点に到達すると，その結果として，均衡，すなわちフォルムをつくり出す。　(149頁)

……すべての運動は，その結果として，ある均衡の状態を創造もしくは維持する。有機的なものであろうと，無機的なものであろうと，物質の領域では，この均衡は，あるフォルム，すなわち構成のかたちの確立においてしか見出されない。　(155頁)

フォルム……すなわち構成の場あるいはかたち。　(155－6頁)

すべてのフォルムは閉ざされている。　(159頁)

私がフォルムというのは，単にかたちの抽出を意味するのではなく，それが確立する閉鎖というこの事実によって，ある場の制定をも意味する。　(163頁)

……その中に事物が閉ざされて存在するところのフォルム。　(171頁)

動体は，いたるところで，おのれのもろもろの終点に出会い，おのれの見出す限界によって，あるフォルム，すなわち閉ざされたかたちを構成する。その動体は，自分に対して，以後逃れることのできないある囲いをつくりだす。　(185頁)

以上を総合すれば，クローデルのいうフォルムとは，まず第一に，事物を閉じこめる囲い，又は容器[9]のようなものである。従って，このフォルムは，わざわざ「閉ざされている」と表現されるにいたる。しかし，それは，単にその外側の部分，輪郭，かたちを意味するのではなく，その中に閉じこめられた場をも意味する。すなわち，その事物が構成されている場，均衡の確立された場である。アンドレ・ヴァションは，クローデルのフォルムはメルロー＝ポンティの「構造」に案外近いものではないかとしている[10]。私自身は，もっと伝統的な意味での，化学や生物学において構造といわれているものを連想させられた。

さて，ここに至って，クローデルにおけるフォルムは，アリストテレスやトマスの形相といった抽象的な概念から離れて，極めて具体的なものとして示されたわけである。実際，彼は，このようにして定義されるに至ったフォルムが，自然界の各事物において，いかに確立されているものであるかを，無生物，生物（植物，動物）という風に区分して，それぞれについて考察しようとしている。まず，無生物と生物の相違は，無生物においてはフォルムは一度に完成実現されるのに対して[11]，生物においては除々に実現されていく，つ

まり成長をはらんだフォルムであるとしている[12]。さらに，植物と動物の相違については，植物はどんどん生長しながら，自分に指定されたフォルムを満たしていこうとするのに対して，一度成長してしまうともはやそれ以上大きくなれない動物は，過剰なものを排泄しながら，自分の一定のフォルムを維持するというものである[13]。こういった区分や考察にかなり粗雑な点があるのは否みえないが，少なくとも，クローデルが，自然的世界の中に，すべての事物が自分に指定された一定のフォルムを確立し，それを維持しようとして努める姿を見たということだけは，明確に示されていよう。

以上が，『詩法』の中に展開されているクローデルのフォルムの概念である。初めにも述べたように，フォルムは非常に幅広い意味を持った言葉であり，クローデルは，この言葉の多面性を利用して，この概念の抽象性と具体性の両方を提示したのである。又，それだけに，非常につかみどころのない，定義のしにくい概念であった。アンドレ・ヴァションも，このフォルムの概念のこういったとらえどころのなさをこう指摘している。――「クローデルが，このフォルムという言葉をトマス哲学から借りてきたということは確かです。しかし，彼が，何度も，くどいほど，すべてのフォルムは空間に直接関係するものであり，閉ざされたかたちを構成すると繰り返しているのを見ると，この概念と，詩人が『神学大全』の中に見出し得たものとの間に，何らかの影響関係が認められるかどうか疑問に思われます[14]。」ヴァションは又，クローデルのフォルムの概念を，トマスの形相概念とは別物として，完全に切り離してしまっている。確かに，ヴァションのこの指摘もある意味で正しいといえる。フォルムを事物の構成の場ととらえたり，ましてや，事物を閉じこめる囲いや容器のようなものとしたりするのは，アリストテレスやトマスの形相概念とは無縁のものである。しかし，クローデルのフォルムの具体性，アリストテレス，トマスの形相概念の抽象性という次元の相違は認めるとしても，やはり，クローデルのフォルムの概念の出発点が，アリストテレス，トマスの形相概念であり，それがこの概念を形作る上で積極的な働きをなしたことは否定できないと思う。クローデルは単に言葉だけを借りてきたのではあるまい。事実，このフォルムの概念と，アリストテレス，トマスの形相概念との間に根本的な類似性を認めることができる。まず第一に，個々の事物において，フォルムを質料的物質の優位に置き，この物質を限定するものとみなしている点，第二に，フォルムが事物を現実存在たらしめているとする点，第三に，フォルムの完成，実現を運動の終点，目的とみなしている点である。こういった点は，いずれも，クローデルのフォルムの概念が，アリストテレス，トマスのエイドス，フォルマから出発したものであるということを十分にうかがわせるものである。結論として，私は，彼のフォルムの概念は，形相という抽象的な概念を，自然的世界の極めて具体的な次元に移しかえ，そこから独自のものへ発展させていったものではないかと思う。

では最後に，クローデルが何故このようなフォルムの概念を設定しなければならなかったのか，又，生物進化論への拒絶反応に典型的にあらわれているように，自己の思想的発

展に拘束を加えてまでも，この概念に固執しなければならなかったのかを考えてみたい。

まず第一に，世界を認識することを務めとする彼のようなタイプの詩人にとっては，「これは何を意味せんとしているか。」という問いかけを発すべき具体的個物の存在は重要なものであった。従って，このような感覚し，認識しうる具体的個物の現実存在を可能にし，事物をそのものたらしめている原理が何であるかをとらえる必要があり，それをフォルムの中に見出したのである。そして，その際，アリストテレス，トマスの形相概念がその出発点となったのであろう。

第二に，世界を活気づけている運動の無制限，無軌道な力に歯止めをかけ，事物の出現を可能にするものを必要としたからである。運動を閉じこめるフォルムという概念がなければ，クローデルにとって，世界は一切が無差別に，無秩序に流動する混沌の世界にしかなりえなかったであろう。しかも，振動という形に最も典型的にあらわれているように，フォルムは空間的には事物を限界づけるものではあっても，それによって，宇宙の力動性，時間の創造性が否定されるということはないのである[15]。

第三に，フォルムが事物の差異をつくりだしているものであるからだ。そこから，世界の多様性，事物の固別性がうまれてくる。共生論を世界観の根底に据え，万物の連帯性を説くクローデルにとって，事物が相互に認識し合う為には，互いに共通なものが必要であり，それが運動であった。しかし，彼は，すべての事物がその相違性，個別性を失って，一つに融合してしまうという考えには心から嫌悪を抱いていた。フォルムの概念は，このような忌むべき万物融合の考えをきっぱりと否定するものでもあった。

第四に，絶えざる生成と消滅が認められ，一切が運動であるこの世界の中にあって，ある期間であるにしろ，個々の事物が一定の相のもとに存在しうるのは，フォルムにおいてであったからだ。——

> 実在するあらゆる事物において恒常なもの，それは，その中に事物が閉ざされて存在するところのフォルムである。　(171頁)
>
> フォルムしか恒常なものはない。　(174頁)

クローデルは，認識することのできる確かな事物が存在し，それが一定の姿をとり続けることに詩人としての限りない喜びを感じたのである。

しかも，単にそれだけでなく，彼は，自然的事物がそれぞれ同一のフォルムの下に繰り返し繰り返し世界の中にあらわれるのを認めた。同じフォルムのバラ，同じフォルムのスミレである。クローデルは「類似の」とは言わない。常に同一のフォルムと言う。ここに，フォルムは，彼にとって単なる恒常性ではなく，恒久性，永続性をもつものとしてとらえられるに至る。これが，初めに引用した，ジャック・リヴィーエールに宛てた手紙の部分の意味である。又，彼は次のようにも語っている。——

……我々は何ものについても，始まる，あるいは終るとも言えない。我々は，固定したもろもろの粋がとどまり続け，それらを運動する物質が満たすのを見る。
(203頁)

そして，繰り返し繰り返し，事物が恒久性を持ったフォルムの下にあらわれるということに，クローデルは個々の事物の持つ神聖さ，重要性を認めたのである。——

万物の永遠の新らしさ。その反復は，造物主が永遠の語彙集のもろもろの単語に与える如く，それらの事物に与え給うた至高の，そして聖なる重要性を示している。
(125頁)

世界から意味を取り出そうとし，世界を何かの象徴と考える彼にとって，その手掛かりたる事物は，それにふさわしい神聖さを備えたものでなければならなかったのである。

以上をまとめるならば，フォルムの概念は，詩人クローデルにとって，この上もない喜びを世界の中に見出させてくれるものであった。又，この概念は，力動的な宇宙観を持つ彼にとって，世界が秩序と安定性を保つ為の，いわば最後の砦であり，その為，必要以上の固定性，絶対性をこのフォルムに与えざるを得なかったのである。その結果，フォルムは，恒常性から恒久性，永遠性へと次第にその絶対性を増していき，ついには，かつての法則に代わるものとして示される。すなわち，世界のすべては，常に変わらぬもろもろのフォルムをうみだし，維持する為にあり，そして，世界はこのフォルムによって支配されているとする。——

もろもろのフォルムがあるのであって，法則があるのではない。(125頁)
宇宙は端から端まで同一の諸成分で形作られ，科学が同一の法則と呼び，私が同一のフォルムと呼ぶものによって支配されています[16]。

このようなフォルムであったからこそ，この絶対性を突崩して，変化を導入する進化論をクローデルは許し難いと感じたのであろう。

本論では扱うことができなかったが，他のテーマとのかかわりを探っていく中で，このフォルムの概念が彼の思想の中でいかに重要な位置を占め，又同時にその限界をつくりだしているものであるかも，次第に明らかになっていく。

テキスト

Art poétique, Œuvre poétique, Gallimard, "Pléiade", 1967.
ここからの引用のページ数は本文中に括弧で示した。

注

1) 本文の中でも触れたが，クローデルはこのformeという語に様々な意味を託している。日本語に置きかえると意味が限定される為，ここでは訳さずにすべてフォルムで通した。又，本論で問題とするのは，知性認識における可知的なフォルムではなく，自然的物体のフォルムであることを断わっておきたい。
2) "Introduction à un poème sur Dante", *Accompagnements, Œuvres en prose,* Gallimard, "Pléiade",1965, p. 425.
3) Lettre à Jacques Rivière du 23 mai 1907, *Correspondance avec Jacques Rivière(1907-1914),* Plon, 1963, p. 57.
4) Cf. *Mémoires improvisés,* Gallimard, 1969, pp. 232-3.
5) Cf. Ibid., p.49 et p.195.
6) *Journal,* tome I, Gallimard, "La Pléiade", 1968, p. 144.
7) Lettre à Louis Massignon du 30 mai 1912, *Correspondance avec Louis Massignon(1903-1914),* Desclée de Brouwer, 1973, pp. 167-8.
8) *Mémoires improvisés,* p.231.
9) Cf. Lettre à Gabriel Frizeau du 12 juillet 1907, *Correspondance avec Francis Jammes et Gabriel Frizeau (1897-1938),* Gallimard, 1952, p. 106.
この手紙の中で，クローデルはフォルムを閉じた器（vase clos）と表現している。
10) André Vachon, *Le Temps et l'Espace dans l'œuvre de Paul Claudel,* Editions du Seuil, 1965, p. 218.
11) *Art poétique,* p. 156.
12) Ibid., p.156.
13) Ibid., p.162.
14) *Le Temps et l'Espace dans l'œuvre de Paul Claudel,* p.249,
15) Cf. Lettre à Gabriel Frizeau du juillet 1907, op. cit., p.106.
この手紙の中で，クローデルは『創造的進化』に示されたベルクソンの思想のいくつかの点に共感を示し，自己の思想との共通性も認めている。しかし，自分とベル

クソンを隔てる最大の相違点として，このフォルムの概念をあげる。すなわち，生命が可能になる為には，ベルクソンが主張するようなexplosifだけではなく，vase clos（すなわちフォルム）が必要だというものである。確かに，このフォルムの概念は両者を決定的に引き離すものである。クローデルはこのフォルムに固執するあまり，同じように運動及び時間の持続に注目し，その創造性，ディナミズムを主張しても，おのずと制約を受け，そのスケールの大きさではとうていベルクソンにはかなわない。ベルクソンに比べれば，クローデルの宇宙観はきわめて静的であるといえる。

16) Lettre à Jacques Rivière du 23 mai 1907, op. cit., p. 57.

(D. 54)